

# 琉球大学学術リポジトリ

キホーテの滑稽化による問題の後景化—『ドン・キホーテ正論』第13編についての新たな解釈の試み—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科 (欧米系) 公開日: 2013-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 正士, Suzuki, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002007464">https://doi.org/10.24564/0002007464</a>

## キホーテの滑稽化による問題の後景化

— 『ドン・キホーテ正編』第13章についての新たな解釈の試み—

鈴木 正士

### 0. 滑稽化される存在キホーテ—筆者の仮説

『ドン・キホーテ正編』(*El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha I*, 1605) 第13章において、キホーテは、決闘の前に騎士が加護を求める対象は〈思い姫か神か〉について意見を述べている。キホーテが、グリソストモ(Grisóstomo)の埋葬に参列しようとしていた途上出会った、同じくその場に赴こうとしていた旅人ビバルド(Vivaldo)からこの質問を問われたからだ。

キホーテとビバルドが出会ったとき、まず、ふたりは、グリソストモがマルセラ(Marcela)という美しい娘に失恋したために死んだという話題について語り合う。この話が一段落したところで、キホーテが時代や場所にそぐわない騎士の格好をしているのは自分のことを騎士だと思い込んでいるからだ、と知ったビバルドは、キホーテをからかって楽しむ目的で、騎士は決闘の前に〈思い姫か神か〉どちらに加護を求めるのか、という質問をする。ふたりのやりとりは、ある程度長いあいだおこなわれたあと、グリソストモの葬式の場に到着すると、解答が示されないまま終了する。

13章を含んだ11章から14章にわたって描かれるエピソード(筆者は「グリソストモの葬式のエピソード」と名づけている)は、《物語》の働きとともに、《愛か神か》を中心的問題として展開している(この点についてはすでに筆者は論考を発表済み<sup>1)</sup>)。13章における〈思い姫か神か〉に関するキホーテの意見が《愛か神か》という問題を導入する役割を果たしている、と容易に考えることができるはずだ。なぜなら、〈思い姫か神か〉は、〈思い姫への《愛》か《神》への信仰か〉という問いだからだ。

ところが、テキストを一読するだけでは、〈思い姫か神か〉がそのような重要な働きをしているとは大半の読者は気がつかない。時代錯誤の滑稽なことを言うキホーテのたわいもない馬鹿話として片付けられてしまうだろう。しかし、実は、キホーテは、〈思い姫〉への《愛》と《神》への信仰について正しいことを伝えているのである。それにもかかわらず、〈思い姫か神か〉が《愛か神か》という問題を紹介していることをほとんどの読者は認識しない。

これは、作者であるセルバンテス(Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616)が、滑稽化したキホーテに〈思い姫か神か〉について意見を言わせることで、《愛か神か》という問題を後景化しようとしているからではないだろうか。

《愛か神か》が本エピソードにおいて軸を成す問題であることは、14章におけるグリソストモの遺稿の詩である「絶望の歌」についての考察によってと、11章におけるアントニオ(Antonio)の〈司祭である叔父〉とマルセラの〈司祭である叔父〉との対照的な思想を対比することによって、筆者は別稿で明らかにした<sup>2</sup>。《愛》を重んじる〈司祭である叔父〉と共作した〈希望の歌〉を歌ったアントニオが希望を持つのに対して、《神》を絶対とする〈司祭である叔父〉に育てられ強い影響を受けたマルセラから拒絶されたグリソストモは「絶望の歌」を書き自殺することから(テキストには、グリソストモは自殺した、とは明記されていないが、筆者は、彼はマルセラと《結婚》できなかったため自殺した、と考える<sup>3</sup>)、作者は《愛》を重視する姿勢を示し同時代の行き過ぎた信仰を批判している、と考えられた。本エピソードはライリーや本田が唱えるような《愛》だけをテーマにしたものではない<sup>4</sup>。17世紀における《神》への信仰のあり方についても問題としているのだ。

しかし、教会権力が絶大だった17世紀当時、あからさまに《愛か神か》を問うことはできなかった<sup>5</sup>。それゆえ、作者は、《愛か神か》という問題を後景化している、と考えられるのである。

この目的のために、作者は、ピバルドに、キホーテを変人と見なし滑稽化させることで、キホーテから信頼感を奪い彼の意見から重要性を隠そうとしているのだ。そのため、キホーテは〈思い姫か神か〉について正当なことを言っているにもかかわらず、大半の読者は〈思い姫か神か〉が《愛か神か》を導いて

いることを認めない。それにくわえて、〈思い姫か神か〉が騎士についての徳目であるため、〈思い姫か神か〉が《愛か神か》という普遍的な問題を導く意見には見えない。しかも、キホーテは、騎士道物語を読みすぎたために自分のことを騎士だと思い込んでいる常識外れの男だ<sup>6</sup>。このようなキホーテに、騎士に関する〈思い姫か神か〉についての意見を述べさせることで、作者は、《愛か神か》を容易には見つけ出せないように仕組んでいるものと思われる。

そうすることで、作者は、《神》への信仰に関して敏感な読者にだけ《愛か神か》を示唆しようと意図している、と考えられるのである。

そこで、本稿ではまず、13章におけるキホーテとビバルドが話題とする〈思い姫か神か〉は、本エピソードの中心的な問題である、《愛か神か》を導入しているにもかかわらず、そのような重要な問題提起に見えないのは、キホーテを滑稽化することによって問題を後景化しようとする作者の意図に因る、という点を明らかにしたい。そして、それは、本エピソードの要となる問題が《愛か神か》であるという点を、異端審問が機能していた時代に《神》への信仰を問題視する読者に対してだけ、作者がひそかに伝えようとしているからだ、という点も提出したい。

そのため、まず1で、本エピソードの梗概を紹介したあと、2で、《愛か神か》の問題をいま一度説明しようと思う。そのうえで、3では、ビバルドによるキホーテの滑稽化、次に4で、騎士は《神》のためにある、というキホーテの意見は正しい、という点、5で、〈思い姫〉への《愛》も《神》への信仰も両方とも大切だとキホーテは述べている、という点を示したあと、6で、結局キホーテは気のおかしな男と断定される、という点を確認するが、7と8で、しかし、キホーテの〈思い姫〉に関する考えは《神》についてと同様正しい、という点を明らかにしたい。そして9で、〈思い姫か神か〉を《愛か神か》と認識できない理由について考察し、10で、本稿における結論として、《愛か神か》の問題を後景化する作者の真意を明示する。さらに最後に11で、別稿の予告を記そうと思う。

## 1. 「グリソストモの葬式のエピソード」の梗概

まず、本エピソードの梗概を、とくに本稿の問題に深く関係している 13 章を中心にして紹介したい。

11 章では、山羊飼いたちの小屋で、キホーテたちを前にして、オラージャ (Olalla) という娘への〈叶わぬ恋〉に悩む山羊飼いやアントニオが、彼の〈司祭である叔父〉に作ってもらった、彼女が実は自分のことを愛してくれている、という内容の〈希望の歌〉を歌う (95-102<sup>7</sup>)。12 章では、小屋にやってきた別の山羊飼いや、グリソストモと、両親を早くに亡くし〈司祭である叔父〉に育てられたマルセラとの関係について、次のように語る。マルセラを愛したグリソストモは、突然羊飼いやになったマルセラを追い求めたが、拒絶され、その朝亡くなり、次の日葬式が営まれる、と (103-109)。13 章では、翌朝キホーテが埋葬の場所へ向かう途中、キホーテと同じくグリソストモとマルセラの恋の顛末に興味を抱きグリソストモの葬式に向かっていた紳士ビバルドと出会う (109-110)。キホーテとのあいだで、グリソストモたちの話が一段落したところで、キホーテが自分自身を遍歴の騎士だと思い込んでいる時代錯誤の男だと知ったビバルドは、キホーテに、遍歴の騎士は、戦いの前に、神にではなく思い姫に加護を求めるのはどういう理由に因るのか、と尋ねるが、キホーテは明快な解答を示さない (110-116)。到着した埋葬の場で、マルセラがグリソストモに対して冷たい仕打ちをしたことについては彼の遺稿に詳しいと聞いたビバルドは、グリソストモの書きのこした「絶望の歌」という詩の朗読を始める (116-119)。そして 14 章で、「絶望の歌」が読まれるが (119-124)、それが終わったとき、マルセラが現れ弁明の言葉を述べるとすぐに森の奥深くへ帰っていく (124-129)。

以上が、本エピソードの梗概である。

## 2. 《愛か神か》という問題

ここで、「グリソストモの葬式のエピソード」における中心的な問題は、キホー

テが導入していると思われる、《愛か神か》だ、と考えられる、という点について、もう一度説明しておきたい。

それは、別稿で考察を加えたが、14章におけるグリソストモが書きのこした「絶望の歌」の中で示される〈残酷な女〉である〈きみ〉とマルセラとの比較によって、《愛》を大切に考えるアントニオの〈司祭である叔父〉とマルセラの〈司祭である叔父〉とのあいだでの思想の対立から読み取れた。

「絶望の歌」の中で描かれる〈きみ〉と、グリソストモの葬式で弁明するマルセラの言葉を対比すると、マルセラの方が、彼女との《結婚》を願う男たちを完全に無視し《愛》を拒絶するという点で、《愛》をもてあそぶ〈残酷な女〉である〈きみ〉よりも冷酷であり、それはマルセラが《神》中心主義者であることに因る、と暗に示されている<sup>8</sup>、と考えられた。マルセラは、「正真正銘の善良なキリスト教徒である」(106)〈司祭である叔父〉に育てられ強い影響を受けたため、《神》との合一だけを望んでいたのだ<sup>9</sup>。

一方、アントニオと実質上〈希望の歌〉を共作した<sup>10</sup>彼の〈司祭である叔父〉は、歌の中で「聖教会では縫った絹糸で夫婦の絆を結んでくれる」(102)とあらわしていたため、地上的な《愛》を重んじる《人間》中心主義思想の持ち主と考えられた<sup>11</sup>。それに対し、グリソストモの愛したマルセラの〈司祭である叔父〉は《神》の信仰を絶対とする正統思想を奉じている、と考えられた<sup>12</sup>。それぞれの関係する〈司祭である叔父〉の抱く思想の影響が、アントニオとグリソストモの生と死という対照的な結果を生んだ。《愛》を大切に思う〈司祭である叔父〉と共作した〈希望の歌〉を歌ったアントニオは、希望を持って生きていく一方、《神》を重んじる〈司祭である叔父〉の影響を受けたマルセラを愛し、彼女から拒絶されたグリソストモは、「絶望の歌」を書きのこし自殺した<sup>13</sup>。

マルセラという《神》中心主義者から《愛》を拒まれたグリソストモを自殺させることによって、作者は、読者に、17世紀当時の高まり過ぎた《神》への信仰に対して警鐘を鳴らしているのではないのだろうか<sup>14</sup>。

このため、本エピソードの中心的な問題は《愛か神か》だと考えられるのである。

### 3. キホーテを滑稽化する存在ビバルド

14章においては《愛か神か》を中心にして「絶望の歌」が展開するが、この問題は、13章でビバルドの〈思い姫か神か〉の質問に答えるキホーテが予告している、と考えられる。だが、一見〈思い姫か神か〉が《愛か神か》を意味しているようには思えない。その大きな理由は、作者が、ビバルドに、キホーテを馬鹿者扱いさせ、からかいの対象に仕向けていることだ、と考えられる。そのため、キホーテは〈思い姫か神か〉について正しい意見を述べているにもかかわらず、大半の読者は、ビバルドの視点に立ち、キホーテをまともな意見の言える一人前の人間と認めないため、〈思い姫か神か〉が《愛か神か》を導入していることに気がつかない。これは、キホーテによる《愛か神か》の予告を、同時代における《神》への信仰を問題視している読者にだけ理解してもらおうと作者が意図しているからではないのだろうか。

そこで、キホーテを時代錯誤の変った男と見なしたビバルドがキホーテを滑稽化するため、キホーテの意見は軽視される、という点を見ていきたい。

ビバルドは、グリソストモとマルセラの話題が一段落したとき、キホーテに、「こんなにも平穏な土地をそのように鎧かぶとに身を固めていく」理由を尋ねる(110)。それに対し、キホーテは、これらは遍歴の騎士のために考え出されたものであると言い、「およばずながら拙者は遍歴の騎士一統の末席に連なる者でござる」と答える(111)。

この返事を聞いたまわりの者はみな、キホーテは「狂っている(loco)」と思い込む(111)。ビバルドは、「彼の狂気(locura)がどのような種類のものか」調べてみようとする(111)。

ここでいう狂気とは、いわゆる狂気ではなく、時代錯誤から生じた頓珍漢な様子といった意味である。

ビバルドは、キホーテに、遍歴の騎士とはどのようなものか、と再度質問する(111)。

彼は早くからキホーテの奇矯さに気づいているが、それを確かめるために、キホーテとの会話を続けようとするのだ。

騎士についてのビバルドからの質問に対し、キホーテは騎士の来歴について詳しく話し始める(111)。アーサー王(Rey Arturo)からはじまりスペインの騎士にまでふれたあと(111-112)、「拙者は罪深き者ではありますが、誓願したこと、ならびに、いま名をあげた騎士の方々が信奉されたことを実践しているのでござる」と言うのである(112)。

キホーテの話聞いていたまわりの者たちは、「キホーテが正気を失っていること」をはっきり確認し、「彼を支配している狂気の種類」を知り大いに驚く(112)。

その場にいた者たち全員が、ビバルドからの質問に答えたキホーテに、常識からの大きなズレを感じとるのだ。

ところが、ビバルドは、彼自身がひどく風変わりな人物と見なしたキホーテから遠ざかろうとはしない。反対に、グリソストモの埋葬場所までの道のりを「退屈せずに過ごそうと」、キホーテに、遍歴の騎士の務めは修道士のそれよりも厳しいに違いない、と言って、話を続けさせるのだ(112)。面白半分て問うビバルドに対し、キホーテは、修道士方の務めも厳しいのは認めるが、騎士は修道士が祈る内容を野天でおこなうため、遍歴の騎士は、修道士よりも厳しい状況に置かれている、このため、「地上における神のしもべ」であり、「地上において神の正義を実践する腕」である、と真面目に答えるのである(112)。

ビバルドは、キホーテと出会った当初からキホーテのことを気のおかしな男と認識している。ビバルドがキホーテに騎士道について質問するのは、常識から逸脱したキホーテの時代錯誤ぶりをもてあそび、本来の目的であるグリソストモの葬式参列までの時間を退屈しないですむようにという魂胆からなのだ。暇つぶしのためだけに尋ねた質問だった。ビバルドはただキホーテをからかって楽しんでいるのである。

ビバルドがキホーテにこのような態度で接するため、ビバルドのまわりにはいた者たちはもちろん、多くの読者もビバルドにくみし、滑稽化されたキホーテをただ笑いの対象とみなし、〈思い姫か神か〉についての彼の意見に真剣に耳を傾けようとはしない。キホーテの唱える内容を、自分のことを騎士だと思い込んでいる変人がつぶやくたわごとと見なししてしまう。

作者は、ビバルドに、キホーテを滑稽化させることで、キホーテの発言を取るに足らない内容に見せるよう、意図しているのである。

#### 4.《神》の代理人としての騎士

しかし、キホーテはビバルドの質問に対して正しい解答を返している。なぜなら、キホーテの言うとおりに、騎士が本来《神》の代理人なのは確かなことだからだ。キホーテの言葉は正しいのである。

実際のところ、騎士はキリスト教を起源としている、と言われている。そこで、この点を明確にするために、騎士という階級がキリスト教を源とするという点について、ブムケ、ブルフィンチ、ホイジンガの記述から示したい。

ブムケは、「[ミーリテース・クリスティー]（キリストの戦士たち）ないし、[ミーリテース・ディー]（神の戦士たち）は、キリスト教教会の成立以来、常に重要な概念であった。……中世に入るととりわけ、キリストのために霊的な武器をもって悪魔と戦う僧侶を指すと考えられるようになった<sup>15)</sup>」と記している。そして、11世紀にはいると、「[ミーリテース・クリスティー]が教会とキリスト教のために武器をもって戦う世俗の騎士と君主たちの意味で、初めて用いられるようになったのである<sup>16)</sup>」と述べている。

そのため、騎士加入式は宗教的色彩が濃厚だった。

ブルフィンチによれば、騎士候補者は「きびしい断食の後、徹宵祈祷を行い、懺悔し、聖餐を受け<sup>17)</sup>」、「儀式の行われる教会なり広間なり<sup>18)</sup>」へ行くと、そこで、「候補者が首から吊っている剣は、あらかじめ式を司る僧侶が祝福を受け、再び持主に返した<sup>19)</sup>」。そのあと、司会者である騎士が、「神と聖ミカエル、聖ジョージの御名に依って我汝を騎士となす<sup>20)</sup>」と文句を唱え騎士として承認した<sup>21)</sup>。

さらに、ホイジンガは、「大天使ミカエルの武勲は、「まず最初に遂行された騎士の戦いと勇武」とされた。騎士道は大天使に発する。それは、「地上の軍勢、人間の騎士達」であって、つまりは、神の高御座をかこむ天使の軍勢を、この地上に模倣することにほかならない<sup>22)</sup>。「騎士叙任は宗教思想と深く結びつい

ていて、いわばそれは、「騎士叙品」なのであった<sup>23)</sup>と述べている。

このように、騎士は、キリスト教と強い関係があるのだ。キホーテは正しいことを述べている。騎士とは、キホーテが話したとおり、キリストのために戦う、この世の戦士であり僧侶なのである。

## 5. 思い姫も神も

それにもかかわらず、このあと、ビバルドから、騎士が戦いの前に加護を求める対象は〈思い姫〉かそれとも《神》か、と問われたキホーテは、《神》だとは断言しない(113)。彼の答えは曖昧なままだ。ここからビバルドの質問は〈思い姫か神か〉へと移っていく。ひきつづき、テキストを見ていきたい。

ビバルドは、キホーテの言うことはもっともだと認めつつ、ひとつの疑問をキホーテに投げかける。「遍歴の騎士のなさることで納得のいかないことがいくつもあるのですが、とりわけ、……命を賭けて突撃しようという瞬間に神におすがりしようということを思い出すことさえしないということです」とビバルドは言う(113)。さらに、騎士が戦いの場で、神に祈願する代わりに、思い姫に対して祈るのはどういう理由に因るのか、と問うのである(113)。

ビバルドは、どうしてこのような疑問を抱いたのか次のように説明する。

キリスト教徒ならだれでも「神におすがりする」のが当然のはずだが、遍歴の騎士たちは、「それぞれの思い姫に対し、まるで思い姫が自分の神でもあるかのように敬虔な面持ちでただ一心におすがりしていらっしゃる」のが理解できない、と(113)。そして、このことは、「異端臭くていかがわしい」とビバルドは言う(113)。

騎士が〈思い姫〉を《神》のようにあつかうことは異端的だ、とビバルドは批判するのである。ビバルドのこの質問と批判を契機にして、遍歴の騎士は決闘の前に〈思い姫か神か〉、そのどちらに祈りを捧げるのか、という問題が議論されるのである。

ビバルドのこの批判に対してキホーテは「これはどうあってもやめるわけにはまいらぬのじゃ」と答え、「もしそうしなかったら無作法を犯すことになり

まする」と言う(113)。

その理由をキホーテは次のように述べる。

「遍歴の騎士が、危険極まりない戦いに出陣しようというとき、思い姫がいらっしゃったなら、恋慕のまなざしを注ぐということは遍歴の騎士道の慣習でありしきたりだからでござる」(113)。

騎士が〈思い姫〉にも加護を求めるのは当然だ、とここでキホーテは言っている。だが、《神》の正義を地上で実践する騎士のひとりである、とキホーテは自任しているため、彼が《神》に祈りを捧げるのはあたりまえのことだ。このため、次の言葉もつけくわえるのである。「だからといって、神におすがりするのを怠っていたとお考えになってはなりません」(113)。

〈思い姫〉にも《神》にも両方に加護を求めている、両方とも大切なものだ、とキホーテは言っているのである。

## 6. 狂気の騎士として断定されるキホーテ

〈思い姫〉が話題にのぼったため、このあと、あなたの思い姫は誰かと尋ねられたキホーテがドゥルシネアについて詳細に話すのを聞いた者たちはみな、キホーテを気のおかしな人間と決めつける。ちょうどその時グリソストモの葬式の場に到着し、キホーテとピバルドのやり取りは明確な結論が提出されないまま終わってしまう(115-116)。この展開を、テキストに沿って見ていきたい。

キホーテとピバルドの対話は次のように続く。

《神》にも加護を求めているという、キホーテの意見に対して、ピバルドは追求の手をさらに厳しくする。

ピバルドは、自分が読んだ多くの騎士道物語の中では騎士の決闘はあつという間のことなので、騎士たちが、「神におすがりするような暇を持ちえた」とは思えない、とキホーテに対して否定的な見方をする(114)。さらに、騎士のだれもが思い姫を持っていたということも信じられない、と言いつける(114)。

キホーテは、《神》に加護を求めるか否か、という点にはふれず、ここから、〈思い姫〉の話題に固執していく。「思い姫を持たぬ騎士が存在するなどという

ことはありえぬ」と反論し、「もし愛を抱いていないような場合には正統な騎士とは言えず、庶出のあやしげな騎士ということになりましょうぞ」と断言するのである(114)。

これに対しピバルドは、騎士がみな思い姫をもっているなら、あなたの思い姫はだれか、とキホーテに問う。キホーテは、自分の思い姫とはドゥルシネア・デル・トボソ(Dulcinea del Toboso)だと紹介し、彼女の出自とその美しさについて長広舌をふるうのである(115-116)。

しかし、だれもその名を聞いたこともないドゥルシネアを、キホーテが、美しい姫として描写し、物に憑かれたように一心に語るため、だれひとり、キホーテの言っていることをまともな考えだとは思わなくなる。キホーテの話を聞いた者たちは、「ほかならぬ山羊飼いや羊飼いでさえ、わたしたちのドン・キホーテがはなはだしく常軌を逸していることをはっきりと認めた」(116)とテキストに記されている。

このように、キホーテは我を忘れてドゥルシネアについて話すため、ピバルドだけでなく、キホーテのまわりにいた者たち全員がキホーテを気のおかしな男と見なすのだ。キホーテは、自分のことを17世紀当時すでに消滅していた遍歴の騎士だと思い込んでいる、時代錯誤のたいへんな変わり者、と断定されるのである。

## 7. 〈思い姫〉の重要性

しかし、ここでもキホーテは騎士の徳目に関しては正しい意見を述べている。なぜなら、〈思い姫〉は騎士にとってなくてはならない存在だからだ。

騎士における〈思い姫〉の重要性について、ブムケは次のように説明している。「愛の関係では男女がそれぞれお互いのパートナーとして対し合うのではなく、女性は主(あるじ)であり、男性は僕(しもべ)として、この女性を仰ぎ見るものである<sup>24)</sup>。だから、「女性奉仕の義務は、騎士の徳目訓の中で重要な位置を占めていた<sup>25)</sup>」。

騎士は、ひとたび、ある女性を〈思い姫〉と決めたら、その〈思い姫〉を敬

愛し〈思い姫〉のために働かなければならないのだ。

そのため、キホーテも〈思い姫〉として崇拜するドゥルシネアをほめたたえるのだ。さらに、「遍歴の騎士に思い姫がないのは、木に葉が無いよう、家に礎が無いよう、影にそのもとなる物が無いようなものです」(800)という言葉を口にする。彼は、騎士にとって思い姫の存在がどれほど重要であるかということを常に念頭に置いている。キホーテが〈思い姫〉に固執するのは、〈思い姫〉がいなければ騎士は生きていけない、と知っているからだ。〈思い姫〉は掛け替えのないものなのだ。

キホーテの言っていることは、ここでも、正しいのである。

## 8. 〈思い姫への《愛》か《神》への信仰か)

《神》の代理人である一方、愛する〈思い姫〉のために生きている騎士にとっては、〈思い姫〉も《神》もともに絶対の存在だ。そのため、自分のことを騎士だと思い込んでいるキホーテは、〈思い姫〉への《愛》か《神》への信仰のどちらを騎士が取るべきか明言できない。

騎士とは、思い姫への《愛》と《神》との交差点なのである。本質的に《神》や教会のために戦う戦士であると同時に、〈思い姫〉を定め、常にその女性への《愛》のために生きる、という感情を胸に秘めている存在だからだ。〈思い姫〉と《神》の両方を崇拜しなければ騎士とは言えない。〈思い姫への《愛》か《神》への信仰か)そのどちらか一方を選択することは騎士にはできない相談なのだ。

そのため、自らを騎士と任じているキホーテは、〈思い姫か神か)どちらかひとつを選択することができない。騎士に関するキホーテの意見は正しいのである。

ビバルドは、キホーテを気のおかしな男とみなし滑稽化していたが、実は、常識から大きくずれたキホーテの中に真実が読み取れるのだ。キホーテは、ビバルドの〈思い姫か神か)という質問に対して誠実に悩み、正しい解答を提出しているのである。

## 9. 認識されない問題：《愛か神か》

この〈思い姫か神か〉が、14章での「絶望の歌」における《愛か神か》という問題を導入する働きをしている。キホーテは、〈思い姫への《愛》か《神》への信仰か〉そのどちらを選択するかで悩んでいるからだ。

ところが、多くの読者は、このような簡単なことが見抜けない。

それは、作者であるセルバンテスの意図に因るものと考えられる。

3で述べたように、作者が、ビバルドに、キホーテを滑稽化させているため、読者のほとんどは、キホーテが〈思い姫か神か〉について意見を言うことで、騎士の本質的問題を提示している、とは受けとめない。

さらには、〈思い姫か神か〉は騎士にとっての固有の問題であるため、いくらキホーテが正しいことを言っても、〈思い姫か神か〉が騎士だけに妥当する問題だと見なされ、これが《愛か神か》という一般的な問題を示唆していることに気がつかないのである。しかも、〈思い姫か神か〉について意見を述べているのは、騎士道物語を読み過ぎたために現実と虚構の区別を失った、自分のことを勝手に騎士だと思い込んでいる男キホーテだった。ますます〈思い姫か神か〉という意見は蔑ろにされてしまうのだ。

作者が、滑稽化された常識から大きくずれたキホーテに〈思い姫への《愛》か《神》への信仰か〉について語らせるため、大方の読者たちは、〈思い姫か神か〉が《愛か神か》という問題を導入しているという、単純な事実を認識しないのである。

## 10. 問題を後景化させる存在キホーテ—本稿における結論

「グリソストモの葬式のエピソード」における中心的問題が《愛か神か》であることは、14章における「絶望の歌」についての考察と、「絶望の歌」と〈希望の歌〉のそれぞれに関係するマルセラの〈司祭である叔父〉とアントニオの〈司祭である叔父〉の対照的な思想を比較することで明らかにされたが、《愛か神か》というこの問題は、13章において、キホーテによって導入されていた。

ビバルドが問う、騎士が決闘の前に加護を求めるものは〈思い姫か神か〉という質問にキホーテは意見を述べているからだ。〈思い姫か神か〉は〈思い姫への《愛》か《神》への信仰か〉という問いである。要するに、《愛か神か》と同義語なのだ。キホーテは、〈思い姫か神か〉について意見を述べることで、《愛か神か》という問題を堂々と紹介していたのだ。

それにもかかわらず、多くの読者は、キホーテが〈思い姫か神か〉について意見を述べることで《愛か神か》を提示しているとは思わない。

ここには、作者の意図が存在する。作者は、キホーテを滑稽化することで、《愛か神か》という問題を後景化しようとしているのだ。

作者は、ビバルドを、キホーテを滑稽化する者として設定していた。ビバルドは、キホーテを常識から逸脱した男と見なし、率先して彼から威厳や信頼感を奪う役割を果たしているのだ。ビバルドがキホーテを滑稽化したため、キホーテはまわりの者や読者たちからの信頼を失った。実はキホーテは〈思い姫〉や《神》に関して正しいことを言っていた。しかし、ビバルドの視点を自分のものとした大半の読者は、キホーテの意見を軽視し耳を傾けようとはしなかった。そのうえ、キホーテの〈思い姫か神か〉についての意見は、騎士にとっての問題だ。そのため、実際はこの問いが普遍的な《愛》や《神》の問題に関連しているにもかかわらず、読者には、騎士道に関する問題としか映らないのだ。しかも、キホーテは、自分のことを騎士道物語の騎士だと思い込んでいる変人だった。なおさら、キホーテの意見を取り合わなかった。

滑稽化したアナクロニズムのキホーテに、騎士に特有の問題と思われる〈思い姫か神か〉についての意見を言わせることで、作者は、当時の《神》への信仰のあり方に関心を持たない読者には〈思い姫か神か〉が《愛か神か》を導入していることが目にはいらないう、もくろんでいるのだ。

セルバンテスは、本エピソードをとおして、《神》を重んじるあまり《愛》を犠牲にしなければならない、同時代における狂ったような信仰の高まりを批判していた、と考えられる。だが、そのような《愛》に対する不寛容な時代だったからこそ、《愛か神か》という問題をあからさまに提示することはできなかった。そのため、この問題を導入するキホーテを滑稽化し問題を後景化すること

で、同時代の宗教体制に疑問を持っている者たちだけに、本エピソードは《愛》をテーマにしているだけではなく、《神》をも問題としているとひそかに読み取れるように、作者は意図しているのである。

## 11. 別稿の予告

アントニオが希望を抱き生きていく一方、グリソストモが死を選ぶのは、アントニオが《愛》を重んじる（司祭である叔父）と共作した〈希望の歌〉を歌ったのに対して、グリソストモは《神》を第一とする（司祭である叔父）に養育されたマルセラから拒絶されたからであった。

グリソストモが「絶望の歌」を書き死んだのは、マルセラが《愛》よりも《神》を選択したからなのだ。

そのため、グリソストモは《神》を恨んだに違いない。《神》は、愛するマルセラをグリソストモの手から奪った張本人だからだ。

しかし、ただ憎んでいただけではないはずだ。もっと複雑な心境だったのではないのだろうか。グリソストモも、マルセラと同様 17 世紀スペインの人間として描かれているため、《神》を信仰していた、と考えられるからだ。テキストに、グリソストモは「聖歌や聖体神秘劇を書いていた」（105）と記されているほどだ。マルセラとは違ったかたちで、《神》を真摯に信仰していた、と考えられる。ところが、マルセラの《愛》を奪った者は、彼が尊崇している《神》だった。グリソストモの《神》に対する思いは容易には説明しがたいものだったのではないだろうか。《神》は批判をまったく許さない絶対の存在になっていたのだ。

作者は、読者に、死んだ状態で登場し思いを口にすることのできないグリソストモの胸の内を想像してもらうことで、絶大になったために生じた《神》の問題を訴えようとしているのではないのだろうか。

そこで、「グリソストモの葬式のエピソード」についての研究の最終稿となる予定の別稿では、作者は、グリソストモの生と死をとおして、同時代の《神》をどのように捉えているのか明らかにしたい。

---

## 注

<sup>1</sup> 筆者は、これまで、「グリソストモの葬式のエピソード」についての研究を、『琉球大学欧米文化論集』第54号、55号、56号において発表しているが、本エピソードは、1.《物語》の働きと2.《愛か神か》という二つの問題を中心にして展開している、と考えている。

本エピソードの問題がこれら二つと見なされる根拠は、11章の山羊飼いアントニオ (Antonio) と14章のグリソストモが同様の行動をとりながらその結果が対照的だったことである。ふたりとも、各々、〈希望の歌〉 *canción de esperanza* (アントニオの歌には、「希望」(esperanza) という言葉が出ているだけでなく、実際、この歌を歌うことによって彼は希望を見出している、と考えられる。この点から、アントニオの歌は、14章で描かれるグリソストモが遺した詩「絶望の歌」とは対照的な〈希望の歌〉と言える。そのため、テキストには〈希望の歌〉という表現はないが、筆者は、この歌の内容から考えて、〈希望の歌〉と呼ぶことにする)、「絶望の歌」 *CanCIÓN desesperada* (これは書名ではなく作品名であるが、原文はイタリック体で表記されている) という《物語》を創作することで、《物語》の力を借りて、〈叶わぬ恋〉という〈受け入れがたい現実〉を受け入れようとする。

この点から見ていくと、本エピソードにおける《物語》とは、《物語》を創作することで、その作者が〈受け入れがたい現実〉を受け入れることができるという特殊な機能を持つ虚構と定義できる。それは、小川の説く「ひじょうに受け入れがたい困難な現実にぶつかったとき、人間はほとんど無意識のうちに自分の心の形に合うようにその現実をいろいろ変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする」(小川、p.22) という、《物語》の働きについての解釈と同じである。(さらに詳しい説明は、鈴木、2010を参照していただきたい)

しかし、アントニオは、〈希望の歌〉という《物語》を歌い生きていくのに対し、グリソストモは、「絶望の歌」という《物語》を書き自死する。アントニオとグリソストモの生と死の原因は、彼らがそれぞれ関係する〈司祭である叔父〉のキリスト教信仰に対する考えの決定的な相違にある、と考えられる。

アントニオと〈希望の歌〉を共作した彼の〈司祭である叔父〉は、《愛》を中心に考える、キリスト教正統思想とは言えない《人間》中心主義的な思想の持ち主だった。(〈希望の歌〉は、アントニオが〈司祭である叔父〉に作ってもらった歌だが、この歌の中では、アントニオの〈叶わぬ恋〉を〈成就する恋〉にして描いているほかに、《神》だけでなく《愛》をも大切に考える、叔父の地上的思想が溶解していることから、〈希望の歌〉は、実質的には、代作というよりも、むしろ共作と言える。この点については、鈴木、2010で詳しく論じた。参照願いたい)。これに対し、グリソストモが愛したマルセラを養育した、彼女の〈司祭である叔父〉は、《神》を絶対視する「正真正銘のキリスト教徒」(106)であり、正統思想を護持する司祭であった。グリソストモが絶望し死んだ原因は、彼が愛したマルセラが、彼女の〈司祭である叔父〉の強い影響を受け、《愛》ではなく、《神》を第一としたことだったのである。

セルバンテスは、意図的に、11章と14章を、《物語》の働きと《愛か神か》という共通点を持ちながら、アントニオとグリソストモの関係する〈司祭である叔父〉が対立する思想を抱いているという、整った対称性を有する対立構造に構成し、アントニオとグリソストモに対照的な結末を与えている。以上のことから、作者は、本エピソードを、1. 《物語》の働きと2. 《愛か神か》という、ふたつの問題を中心にして展開させている、と考えられる。本エピソードは、まず《物語》の働きという問題があり、後景に、より重要な問題である《愛か神か》が隠れているのである。

<sup>2</sup>注1でも記しているが、「絶望の歌」については、鈴木、2012で、ふたりの叔父の対照的な思想については、鈴木、2010で詳しい考察をおこなった。参照願いたい。

<sup>3</sup>エラスムス(Desiderio Erasmo, 1467?-1536)の唱える《人間》中心思想の影響を受け、《結婚》を人間にとって最も重要な営みと考えていたセルバンテスは、グリソストモを、《神》中心主義者であるマルセラと《結婚》できなかつたために自殺させることで、エラスムスの《人間》中心思想を表現し、17世紀当時の信仰のあり方に対して異議を申し立てている、と考えられる。この点については、鈴木、2011で論じた。グリソストモは、マルセラとの〈叶わぬ恋〉

という〈受け入れがたい現実〉を受け入れるために、〈残酷な女〉である〈きみ〉に蔑まれ絶望し自死する、〈ぼく〉という男が主人公の詩「絶望の歌」という虚構を書き、その男に自身を仮託することで、自殺した、と筆者は考える。グリソトモにとっては死が唯一の避難所だったからである。この点については、鈴木、2012で論じた。参照願いたい。

<sup>4</sup> アバジェ・アルセ (Juan Bautista Avalle-Arce) が、『スペインの牧人物語』( *La novela pastoril española*, 1959) という一書を著し、その中で、「グリソトモの葬式のエピソード」における牧人物語の影響について考えを述べて以来 (Avalle-Arce, 1974, p.249)、多くの研究者がこの考えを支持し論考を発表してきた。とくに、ライリー (E. C. Riley) は、本エピソードのテーマは愛だと唱えている。Riley, p.101. また、本田も愛を重視し、本エピソードの問題点は、エロスと自由意志の関係だと捉えている。本田、pp.65-66.

<sup>5</sup> 『ドン・キホーテ』が出版された17世紀初頭のスペインにおいては、カトリック信仰による宗教的統一を目的に、宗教的弾圧が厳しくなっていた。関他、pp.256-59. さらに、「17世紀にはいる頃には異端審問は最大限の権力をもっていた。……疑惑と恐怖に満ち満ちた雰囲気、あらゆる知的生活に害を与えた。……わずかにでも教理に触れるような問題については、意見を自由に述べることは憚られた」。ドミンゲス・オルティス、pp.142-45. このような時代状況のため、セルバンテスは、当時の信仰のあり方に対してあからさまに批判することができなかった、と筆者は考える。

<sup>6</sup> キホーテが騎士道物語を読み過ぎたために現実世界と虚構世界の区別がなくなっただけという点については、鈴木、2008で詳しく考察した。参照願いたい。

<sup>7</sup> 『ドン・キホーテ』のテキストは Francisco Rico 編 *Don Quijote de la Mancha*, Madrid : Alfaguara, 2004 を底本とした。テキストの引用のあとに付した ( ) 内の数字は、すべて上記のテキストからの引用ページをあらわす。なお、引用文の翻訳にあたっては、永田寛定・高橋正武共訳 (岩波書店)、会田由訳 (筑摩書房)、牛島信明訳 (岩波書店)、荻内勝之訳 (新潮社)、岩根圀和訳 (彩流社) 『ドン・キホーテ』の五つの翻訳版を参考に、筆者がおこなった。

<sup>8</sup> この点については、すでに鈴木、2012で詳しく論じた。参照願いたい。

<sup>9</sup>「マルセラが叔父の影響から、〈自然〉という〈修道院〉でなんの束縛も受けずに、孤独に〈純潔〉という〈美〉を守ることで《神》と結ばれたいと望んでいる」(125-128)、という点については、すでに鈴木、2011で詳しく論じた。参照願いたい。

<sup>10</sup>テキストでは「アントニオの歌う歌は、アントニオの叔父がアントニオに代わって作った」(100)と記されているが実質上共作と考えられる、という点については、注1においても記しているが、詳しい考察は、鈴木、2010でおこなった。参照願いたい。

<sup>11</sup>アントニオの〈司祭である叔父〉が、緩やかな《神》の信仰を認めながらも異性との《愛》も大切にされた方がよいと考える、《人間》中心主義的思想の持ち主だ、という点については、注1でも説明しているが、鈴木、2010で詳しく論じた。参照願いたい。

<sup>12</sup>マルセラの〈司祭である叔父〉の思想については、注1でも記しているが、詳しい考察は鈴木、2011でおこなった。参照願いたい。

<sup>13</sup>注3を参照のこと。

<sup>14</sup>この点については、前稿で詳細な考察をくわえた。鈴木、2012を参照願いたい。

<sup>15</sup>ブムケ、p.377.

<sup>16</sup>*ibid.*, p.377.

<sup>17</sup>ブルフィンチ、p.17.

<sup>18</sup>*ibid.*, p.17.

<sup>19</sup>*ibid.*, p.17.

<sup>20</sup>*ibid.*, p.17.

<sup>21</sup>*ibid.*, p.17.

<sup>22</sup>ホイジンガ、p.124.

<sup>23</sup>*ibid.*, p.124.

<sup>24</sup>ブムケ、p.473.

<sup>25</sup>*ibid.*, p.47.

## 引用文献

### 第一次資料

Cervantes Saavedra, Miguel de. *Don Quijote de la Mancha*, ed. Francisco Rico. Madrid: Alfaguara, 2004.

### 第二次資料

Avallé-Arce, Juan Bautista. *La novela pastoril española*, Madrid: Istmo, 1974 [1959].

ブムケ、ヨアヒム. 『中世の騎士文化』平尾浩三・和泉雅人・相澤隆・斉藤太郎・三瓶慎一・一條麻美子訳、東京：白水社、1995.

ブルフィンチ. 『中世騎士物語』野上弥生子訳、東京：岩波書店、1942.

ドミンゲス・オルティス、アントニオ. 『スペイン 三千年の歴史』立石博高訳、京都：昭和堂、2006.

ホイジンガ. 『中世の秋』堀越孝一訳、東京：中央公論社、1976.

本田誠二. 『セルバンテスの芸術』、東京：水声社、2005.

小川洋子. 『物語の役割』、東京：筑摩書房、2007.

Riley, Edward C.. *Don Quixote*, Londres: Allen and Unwin, 1986; trad. esp. *Introducción al « Quijote »*, Barcelona: Crítica, 1990.

関哲行・立石博高・中塚次郎編. 『世界歴史体系 スペイン史1—古代～近世』東京：山川出版社、2008.

鈴木正士. 『『ドン・キホーテ』における創造世界—非騎士道世界から騎士道物語世界への変換行為をとおして』、大津：行路社、2008.

———. 「アントニオの歌う〈希望の歌〉—『ドン・キホーテ正編』11章についての新たな解釈の試み—」、『琉球大学欧米文化論集』第54号、pp.23-50、2010.

———. 「結婚と純潔—『ドン・キホーテ正編』14章に見るエラスムスの人間中心思想の影響—」、『琉球大学欧米文化論集』第55号、pp.1-28、2011.

———. 「仕掛けられた宗教批判—『ドン・キホーテ正編』第14章「絶望の歌」についての新たな解釈の試み—」、『琉球大学欧米文化論集』第56号、pp.1-28、2012.

## El “backgrounding” del tema por la caricaturización de Quijote: interpretación del cap. XIII de Primera parte de *don Quijote*

SUZUKI Masashi

«El Amor o Dios » , un tema central del “episodio del funeral de Grisóstomo” (del cap. XI al cap.XIV de Primera parte de *don Quijote*), es introducida por Quijote en el cap. XIII. Porque Quijote da su opinión sobre si es < dama o Dios > el objeto al que el caballero andante se encomienda antes de acometer. Esta cuestión es planteada por un gentil hombre llamado Vivaldo con quien se encuentra Quijote en el camino al funeral. < Dama o Dios > es una cuestión de < el Amor por dama o la devoción por Dios > . Es decir, es equivalente al « Amor o Dios ».

Sin embargo, la mayoría de los lectores no piensa que Quijote presenta « el Amor o Dios » al opinar sobre la cuestión < dama o Dios > .

Aquí mismo se halla la intención del autor. Intenta esconder el tema del « Amor o Dios » valiéndose de Vivaldo para hacerle a Quijote cómico y, a la par, quitarle la confianza. Aunque la opinión de Quijote acerca de < dama o Dios > es recta, la mayor parte de lectores no se da cuenta de que « el Amor o Dios » es introducido por < dama o Dios > , por ponerse en el mismo punto de vista de Vivaldo e ignorar la opinión de Quijote.

Se piensa que Miguel de Cervantes Saavedra (1547-1616) tenía un pensamiento crítico por la subida de devoción fanática en su época como estimaban a « Dios » tanto que tenían que sacrificar al « Amor » . Pero precisamente por la época en la que se encontraba, no podía expresar de manera explícita el tema « el Amor o Dios ». Por lo tanto, el autor tiene intención de que sólo los que dudan del régimen religioso de esa época entiendan furtivamente que en este episodio no solamente se trata del « Amor » sino también de « Dios » , por hacerle cómico a Quijote que introduce la disyuntiva « el Amor o Dios » como tema de fondo.